

## 発刊のご挨拶

昨年は元号が「平成」から「令和」に代わり、時代の大きな節目となる年となりました。

ここ数年、気象変動の大きい状況が続いています。昨年は春先の高温、夏場の猛暑、集中的な降雨に見舞われたものの、1番草は概ね順調に収穫・調製が進み、サイレーシ用とうもろこしも台風等による倒伏は無く、粗飼料収穫の面では一安心できる一年となりました。しかし、道外における台風被害による生乳の減産、日米貿易協定の発効などにより、当地域の農業も、更なる変化、新たな課題に直面しており、対応が求められています。

本年の営農改善資料は、「身近なデータの活用術」をテーマにとりまとめています。

そもそもデータとは何か？ 紐解いてみますと、データとは「事実や資料をさす言葉、複数の事象や数値の集まりのこと」「伝達、解釈、処理などに適するように形式化、符号化されたもの」「情報を生み出すための素材」（ウィキペディアより抜粋）とされています。「数値」だけではなく、「記録、記述」、「今現場で起きていること」も貴重なデータといえます。

昨今、グローバル化、IT化が進行する中で、データ活用の必要性について取り上げられる場面が多くなっています。あらためて身の回りにある「データ」について見直す機会を作っていただけたらと思います。

営農改善資料は、農業者、酪農試験場、農協など関係機関・団体の皆様から日頃より得た情報を基に、取組が可能な要点を整理して作成しています。

農業者の皆様には、是非この冊子を手に取り、データの有効活用に繋げていただくようお願い申し上げます。

結びになりますが、本冊子の作成にあたり情報提供をいただいた皆様に心からお礼申し上げます。

根室農業改良普及センター  
所長 平林 清美

## はじめに（序論）

自らの農場の状況を目視や感覚で把握することは、農業者にとって必須の技術であり自然に身につくものだと考えられます。しかし、乳質やサイレージの栄養価、土壌中の養分状態など目視や感覚では分からない情報も多く存在します。

これらの情報は、農協による取組や検査機関・飼料会社などへの依頼によりデータとして入手することが可能となっています。

つまり、農場には日々様々なデータが集積している状況にあります。

ただ、実際に利用されている情報はほんの一部にすぎないのではないのでしょうか。

たとえば、項目の意味が分からないと数値の意味も分かりません。意味が分からないものは自然と利用しなくなるものです。

農場の状況把握や改善を考える場合、データの意味と見方を知っておくと、微妙な変化を確かなものとして捉えたり、いろいろな角度から状況を検証したりする手助けになると思います。

近年、根室管内では経営規模の拡大が進み、より効率的な作業体系の構築をめざして搾乳ロボットなどの ICT 技術を導入する農場が増えています。このように、データを読み取る能力はより重要性を増しています。

そこで、令和2年の営農改善資料は、「身近なデータの活用術」をテーマに、集乳旬報、バルク乳スクリーニング検査、乳検成績、粗飼料分析、土壌分析について、事例を織り交ぜてまとめ、農場の経営改善のために活用してもらうことをねらいとして発行します。

# 目次

発刊のご挨拶

はじめに

第Ⅰ章	集乳旬報	・・・・・・・・	1
第Ⅱ章	バルク乳スクリーニング	・・・・	10
第Ⅲ章	乳検成績	・・・・・・・・	16
第Ⅳ章	粗飼料分析	・・・・・・・・	43
第Ⅴ章	土壌分析	・・・・・・・・	57